

東京と世界を結ぶ 広報を目指して

Writer

浅野 五月 ASANO Satsuki

公益財団法人東京都歴史文化財団
東京文化発信プロジェクト室
事業推進課 事業推進係
兼 トーキョーワンダーサイト
事業課 普及調整係

博士前期課程芸術専攻芸術支援領域
平成 21 年度修了

1 特別寄稿

日本において発表の機会を得ることが難しかった若くて有能な芸術家を支援する恒常的な活動の場として、2001年にトーキョーワンダーサイト（以下、TWS）が開設された。TWSは「若手芸術家の発掘・育成・支援」、「国際交流」、「実験的な取り組みへのサポート」を柱とし、本郷・渋谷・青山の3館を拠点に東京から新しい芸術文化を創造・発信。開設から12年を経た現在は、これまでの実績をさらに発展させて国内外の芸術文化のプラットフォームの機能を果たすアートセンターとして活動を展開している。このアートセンターの中で、私は広報を担当している。具体的にはTWSの館全体の広報活動をはじめ、展覧会といった各事業の広報活動、文化に携わる人材育成や子供の多様な価値観の育成を目的とした教育普及事業にかかわっている。国内外の文化機関と連携し、芸術家の国際的な活躍を支援するTWSの活動を、文化にかかわる専門家だけでなく、広く一般にひらき、アートと社会を結ぶ一助となることを目指して、日々業務に従事している。



教育普及事業ではトーキョーワンダーサイトの見学も行っている。©Tokyo Wonder Site

TWSのクリエイター・イン・レジデンスは、アート、デザイン、音楽、建築といった創造的分野で活躍する世界中のクリエイターが滞在制作を行うレジデンス施設である。ここでは、国内外から年間100名を超えるクリエイターが滞在。東京をフィールドに、レジデンスの内外でさまざまな背景をもつ人と出会い、創造的な刺激を受けながら創作活動を行っている。TWSでは創造の過程を重視しており、その現場（スタジオ）を一般公開し、来場者が作品やパフォーマンス、リサーチの成果などの活動経過を体験しながら、クリエイターと直接交流できる機会として「OPEN STUDIO」（以下、オープン・スタジオ）を開催している。

ここで、TWSの広報の一例として、オープン・スタジオの業務を紹介したい。

●開催趣旨の設定

オープン・スタジオを開催する上で一番の根幹となるのは開催趣旨の設定である。そのとき滞在中のクリエイター

にとつての開催意義（キュレーター、ギャラリストをはじめ、一般来場者との出会いや作品を通じたコミュニケーションなど）、来場者にとつての開催意義（作品の制作過程を通じてクリエイターの創造的思考に触れることができるなど）も考慮しながらまとめていく。そしてTWS内でその適時性や妥当性を吟味し、設定していく。

●トーク・シリーズの内容決定

開催趣旨や開催時期が決定したら、次にオープン・スタジオ内で実施しているトーク・シリーズの内容を検討する。参加クリエイターの創作内容の傾向や同時期に開催されているイベント情報、そして関係者や過去の来場者から寄せられた意見など、収集したあらゆる情報を参考にしながら実施内容やゲストの候補案を作成する。さらにそれを会議で検討し、時にはすれ違う意見を調整しながら案を練り上げていく。私が担当したトーク・シリーズでは、アート（特に現代アート界）で活躍されてい



オープン・スタジオでは実験的な試みも多い。この企画は2013年10月に発表された作品に繋がった。「OPEN STUDIO 2013/6月」佐々木文美（快快）のスタジオ ©Tokyo Wonder Site

るキュレーターを招き、各スタジオを訪問しながら作品やその創作プロセスについてクリエイターたちとトークする「スタジオ・ツアー&トーク」を開催した。この企画は、話題性も含めた広報的な視点と「もっと沢山の人に東京での創作活動を見てもらいたい」、「語学力に関係なく気軽にクリエイターの話聞いてみたい」、「国内外で活躍するスペシャリストの意見を聞いてみたい」など、館内外からの声を取り入れて実現することができた。

●ゲストのスケジュール調整

企画内容が決定後、ゲストへの声掛けをはじめ。ゲストの候補の方には企画趣旨を伝え、誠意を持って出演をお願いする。しかし、第一線で活躍されている方々はたいへん忙しく、企画趣旨に賛同いただきながらもスケジュールが合わないケースが少なくない。ゲストとの調整がつかず落ち込むことも多い。ゲストの調整が一番難しいともいえる。

●情報の発信・公開

ゲストを含めイベントの詳細が固まったところで、情報を発信する。開催趣旨に合わせてできる限り効果的に情報を発信したいという思いから、プレスリリースの配信をはじめ公式サイトへの掲載、メールニュース配信やSNS（Twitter、Facebook）など、有効であると考えられるツールを利用している。また、財団各施設や教育機関などに作成したチラシの配架や掲示も依頼する。さらに、参加クリエイターの出身または活動拠点としている国の駐日大使館に後援などの協力もお願いしている。一方、確実に情報を届けて相手に納得してもらいたい場合、直接コミュニケーションをとることが何より大切である。電話あるいは直接訪問し、自分たちの活動意義や事業内容、そして「なぜ相手を選んでお願いに来たのか」、自らの言葉で情熱を持って伝える。実際に、初対面の方への出演依頼や駐日大使館への協力依頼など困難だと思っていた案件を実現することができた。誠意と熱意を行動で表すことが大切なのだ実感している。

●トーク・シリーズ本番

いよいよオープン・スタジオ当日、本番を迎える。トークでは進行を務める傍ら、



クリエイターと来場者が直接交流できる貴重な機会となっている。「OPEN STUDIO 2013/5月」マリナ・カボス（アメリカ）のスタジオ ©Tokyo Wonder Site

会場全体の様子を把握することに注力している。会場の空調は適切か、マイク音量、通訳との連携など問題はないか、来場者の反応などに可能な限りフォローできるように心掛けている。

以上のほか、オープン・スタジオ開催に関わる書類作成、通訳の手配、当日の記録や参加者アンケートの実施など、さまざまな業務があり、これらを2名の広報担当、業務によっては他の担当とも分担し、協力し合いながら行っている。

オープン・スタジオは一例にすぎないが、一連の業務を通して、広報活動に重要なものは、マスコミ、アーティスト、一般市民、同僚など、常に人との関わりの中で「いかに各分野の人との結び役になれるか」ということだと感じている。そこで、常に情報のアンテナを広げて世の中の動きに敏感になり、柔軟な発想が出来るように心掛けている。

さらに、広報活動を成功させるには関係者間との積極的なコミュニケーションが必要不可欠だと認識している。そのためにも、関係者同士の情報共有や意思疎通といった基本的なコミュニケーションを大切に、結びつきを保つよう努めている。特に繁忙期はそれぞれに余裕がなくなるため、注意している。

広報業務の地道なプロセスが実を結び、記事に取り上げられたり、沢山の来場者に恵まれたり、事業が好評を得たりすると、大きな喜びと安堵感に包まれる。広

報の役割を実感することができる瞬間である。もちろん、良い結果になることばかりではなく、必ず何かしらの課題は残る。しかし、課題解決も含めてこのプロセスを積み重ねていくことで、結びつきを強め、広報の役割を確立していけるのではないかと考えている。

現在、私は東京文化発信プロジェクト室に広報担当として勤務している。東京文化発信プロジェクトは、2016年東京オリンピック・パラリンピックの招致活動を機に開始した事業である。東京都と東京都歴史文化財団が芸術文化団体やアートNPOなどと協力し、「世界的な文化創造都市・東京」の実現に向けて、さまざまな分野の国際フェスティバルや子供向けの参加体験プログラム、市民とアーティストが協働するアートプログラム、そしてネットワークなど多岐にわたる事業を実施している。

2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催が決定した今、東京に対する国内外の関心はますます高まっている。また、オリンピックは文化の祭典でもある。この一生に一度体験できるかできないかのイベントを迎えるまで、世界に向けて東京の文化を発信できるまたとないこの機会に、自分ができることは地道に對話を積み重ねていき、広報していくことだと考えている。そして、いつの日か東京の文化と世界を結ぶ一端を担えるよう、今後も励んでいきたい。

1 特別寄稿